



調律師 鈴木均が語る

「コンクールでは出場者が楽器を選ぶのも勝負どころです。また3次予選までは千人程度の中ホールでソロと室内楽ですが、本選は4階席まである大ホールでオーケストラとの共演。音がまるで違い、本選だけ楽器を変更したり会見で調律師の「工夫」を明かしたりする人もいました。

本選だけ楽器を替えたのには驚きました。調律の話も、ファイナリストたちが選んだ曲と楽器の相性に悩む様子が伝わってきます。しかし、意外と2階席の審査員たちは違つところを聴いているかもしれません。

かつての自分も、演奏される曲は意識しました。先輩が自慢話のように、作曲家をイメージして仕事をしたらピアノリストに気に入られたと後輩たちに話す時代

本選だけの楽器変更に驚き

でした。でもさまざまなピアノリストと仕事を重ねるうちに気づきました。調律師が先回りして「協奏曲風」「シヨパン風」などと考えず、基本通り響き合う調律をし、ピアノリストの感性で作曲家の世界をつくれる準備をすればいいと。

外国から演奏に招かれ、行ってみたら100年前の古いピアノや電子ピアノが用意されていたなどという話を耳にします。動揺せず弾き続けるうちに、良いピアノ、良い調律師、良い響きの会場が用意され、鳴りやまない拍手を受ける。これを実感できたらピアノリストとしてステイジが上がったことになるのかな。

「コンクールの様子はYouTubeで動画配信もされました。

同じ演奏を聴きましたが相当に違いますね。「生音」で大事なのは、オーケストラをバックに奥の席まで音が届くかどうかで、大ホールでは楽器ごとの「遠鳴り」の差を感じていました。動画は一番良い場所でマイクが拾うから、ある意味みんな良い音に聞こえます。

それに動画だと技術的なミスは分かりやすい。反対に音楽のニュアンスの変化は現地より情報量が減るので、審査は難しいかも。でも今や国際コンクールの動画配信は当たり前。テクノロジーが演奏へ及ぼす影響は避けられないでしょうね。(聞き手・南拡大朗)



本選でオーケストラと演奏をする鈴木愛美さん 2024年11月24日、浜松市中央区で

浜松コンクール観戦記③